カナダ演劇見てある記

東京大学教養学部助教授
高橋康也

去る七月五日から二十一日まで、カナダを覆うオリンピックのにぎやかな噂のかげにかくれて、ある地味な国際会議が開かれた。「世界演劇批評家編集者会議」というその集まりに参加したのは、地元のカナダのほか、アメリカ、イギリス、フランス、ポーランド、フィンランド、スウェーデン、イスラエル、ソ連、ユーゴ、ルーマニアなど、十数ヵ国の演劇雑誌の編集者と批評家二十名であった。日本からは朝日新聞の演劇担当の扇田昭彦氏と私が招かれた。

会議の第一の目的は、昨年のワルシャワ演劇祭のシンポジウムでもその必要が強調されたところの、世界各国の演劇についての情報の迅速・的確な交換組織を、なんとか現実化しようというところにあった。発起人はカナダのトロントにあるヨーク大学演劇科の教授で、かつカナダの(というより、今や世界の)代表的演劇雑誌「カナダ演劇評論」(The Canadian Theatre Review)の編集長でもあるドン・ルービン氏である。氏は昨年のワルシャワでの声を受けて、そのような情報交換の具体案を検討する会議をオリンピック開催時のカナダで開くことを考え、以来精力的に各国を歩きまわって出席者を選んだり、費用の捻出を画策してきたのである。カナダ側主催者の善意と努力によって、この第一目的は十分に達成され、七月十六日には、オタワのナショナル・アーツ・センターにおける記者会見で、その成果が発表された。今後の世界の演劇の発展のために少からぬ意味をもつと思われるこの成果は、しかし、さしあたり本稿の主題からはずれるので、この会議の第二の目的に話を移そう。

第一の目的をめぐる議論は、どうしても現実的でしんどいものになりがちであったが、それを救うというつもりもあって、主催者はカナダ的ホスピタリティを発揮して、たいへん心憎い日程を組んでいた。会議はトロントで始まったが、三日後にはストラトフォードに場所を変え、つぎにナイアガラ・オン・ザ・レイクへ、さらにレノックスビルへ、そしてオタワへと移動し、最後にオリンピック開始直後のモントリオールで打ち上げとなる、という次第であった。その間、午前午後はもっぱら討論であるが、夕方からは毎晩各地の劇場で観劇、芝居がはねたあと、演出家や俳優たちとの歓談といった順序になるのであった。

もちろん玄人の批評家ばかりの顔ぶれだから、いつも「歓談」とはかぎらない。かなり手きびしいコメントがこちらから提出され、上演側が反論するという場面もたびたびあったし、批評家たちの間でもしばしば意見は対立した。しかし、皆が演劇への愛という、まぎれもない共通要素によって結ばれている以上、能率的にお膳立てされたこのカナダ演劇旅行が、参加者一同にとって、楽しくもまた意味深いもの以外ではありえなかったのは当然である。

実際、カナダの演劇の実態を短期間にこれ以上つぶさに目撃することは不可能だろう。もちろん、すべてがわかったなどと言っているのではない。どの国の芝居にせよ、二十日たらずの経験で、外国人にすべて理解できるような単純なものであるはずがない。私の言うのは、カナダの演劇が、容易には理解しがたい困難な問題を含んでいることが理解できたということである。

トロントにおける会議の第一日の晩、ヨーク大学の小講堂で、会議出席者のためだけに、とくに一つの芝居が上演された。バンクーバー在住の女流劇作家ベヴァリー・サイモンズの小品『身づくろい』(Preparing)を、やはりバンクーバーの演出家ジョン・ジュリアーニが演出し、ヨーク大学演劇科の学生劇団ピーク(P.E.A.K.)が演じたものである。これはすべての点で前衛的であった。サイモンズは一九三八年生まれのユダヤ系カナダ人で、カナダ国内でもまだ十分に認められておらず、国際的にも無名に近いけれど、おそらく今日のカナダにおける最も才能ある劇作家だと、私には思われる。一九六九年に発表した三幕の長篇戯曲『蟹のおどり』(Crabdance)は、独身の五十女が訪れてくる三人のセールスマンを相手に、それぞれの幻想を満たすための芝居ごっこをするという、ジャン・ジュネやハロルド・ピンターを思わせる物語であるが、サイモンズの独自の力量を納得させる力作である。最近作『リーラとは遊ぶこと』(Leera Means to Play)はさらに長大な野心作で、六七年に彼女が訪れた日本の演劇の手法(黒子など)を大胆に利用している。トロントで演じられたのは、小品ながら、およそ写実的なリアリズムのかけらもない、極度に様式化された実験劇であった。

演出をしたジュリアーニはイタリア系カナダ人で、みずからも「狂暴な神」(Savage God)と称する劇団のリーダーなのだが、今はヨーク大学演劇科学生を指導している。その学生劇団の名前のPはProvocation(挑発)、Eは Excitement(興奮)、AはAnimation(活性化)、KはKatharsis(カタルシス)を表わすというのだから、彼らの演劇に対する姿勢がどんなにラディカルなものかは見当がつこうというものである。ともあれ、十分に説得的とはいえなくとも、強烈な印象を与える公演であった。

さて、この前衛的公演によってカナダ演劇の初体験をしたことは、私たちにとって果たして良かったのかどうか、必ずしも確かではない。というのは、この後みた芝居のほとんどは、伝統的範疇に入るものだったからである。このきわだった対照をどう理解すべきか、カナダ演劇とはいったい何なのか——各地の劇場をめぐりながら、この疑問は私の脳裡でますますしつこい問いかけとなっていた。

たとえば、シェイクスピア上演で世界的に有名なオンタリオのストラトフォード祝祭劇場で見た『アントニーとクレオパトラ』は、凡庸としか言いようのない